

バウムガルテン『形而上学』第4部「自然神学」 第1章「神の概念」第2節「神の知性」 試訳

石田 隆太／檜垣 良成¹

はじめに

本稿は、アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテンによる『形而上学』第4部第1章第2節の試訳である。バウムガルテンの『形而上学』は、第1部「有論」〔*Ontologia*〕、第2部「世界論」²〔*Cosmologia*〕、第3部「心理学」〔*Psychologia*〕、第4部「自然神学」〔*Theologia naturalis*〕の4部から構成されており、第4部「自然神学」はその最後の部分にあたる。さらに、その第4部は、第1章「神の概念」〔*conceptus dei*〕と第2章「神の諸々のはたらき」〔*operationes dei*〕に分かれており、その内の第1章が、第1節「神の存在」〔*exsistentia dei*〕³、第2節「神の知性」〔*intellectus dei*〕、第3節「神の意志」〔*voluntas dei*〕に細分化されている。第1節では単純性〔*simplicitas*〕、不可変性〔*immutabilitas*〕、一性〔*unitas*〕などが神に当てはまるものとして考察されていることも考え合わせるなら、ここでの「自然神学」が西洋中世のスコラ学と或る程度の連続性を保持していることが窺える。例えばトマス・アクィナスの『神学大全』第1部の構成を参照するなら、第3問題では神の単純性が、第9問題では神の不可変性が、第11問題では神の一性が論じられる。さらに、第14問題では神の知〔*scientia*〕が、第19問題では神の意志が論じられる⁴。このようにして、バウムガルテンの「自然神学」と西洋中世のスコラ学との間に何らかの連続性を認めることは十分可能なことであるだろう。

しかしながら、それと同時に、バウムガルテンと、トマス・アクィナスに代表さ

¹ バウムガルテンの本文の訳は2人の合議によるものであるが、それ以外に関しては、担当者をI（石田）、H（檜垣）の略記によって示した（I）。

² 「宇宙論」ではなく「世界論」と訳出したのは、増山浩人（増山浩人『カントの世界論——バウムガルテンとヒュームに対する応答』北海道大学出版会、2015）の見解に従ったことである。「十八世紀ドイツの多くの哲学者は、ラテン語 *cosmologia* の *cosmos* に *Welt* という訳語を当てていた。しかも、彼らは、*Welt* という言葉が宇宙以外にも多くの意味を含むことを理解した上で、この訳語を選択していた」（同書、17頁、注6）というのが増山の根拠である（I）。

³ この第1節の部分の試訳としては、檜垣良成・石田隆太「バウムガルテンの「神」概念——『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第1節「神の存在」試訳」（『哲学・思想論集』第42号、2017（近刊予定））がある（I）。

⁴ 『神学大全』の原文としてはレオ版（*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, t.4, Romae 1888）を参照した（I）。

れるような西洋中世のスコラ学との間にはおそらく何らかの非連続性もあるはずだということも直ちに予想されうる。ここでは、神に知があること、ないし神が知性をもつことがどのようにして示されているのかについてトマスとバウムガルテンの違いを一例として示しておくことにしたい。まずトマスでは、『神学大全』第1部第14問題第1項において論じられるように、最高度に単純なものである神が認識者として最高度に非質料的〔*immaterialis*〕であるということが、神において知があることの論拠になっている。それに対してバウムガルテンでは、以下に訳出した § 863 において論じられるように、実在性〔*realitas*〕としての判明な認識〔*distincta cognitio*〕が神においてあることが前提されることにより、神が知性をもつことが示されている。すなわち、主要な論拠が単純性としての非質料性であるのか、それとも実在性としての判明な認識であるのかが大きな違いであることは明らかである。無論、バウムガルテンは神が単純であることを認めているし (§ 838)、神が非質料的であることを認めてもいる (§ 857)。それゆえ、神が知性をもつことを示すための論拠として認識が判明であるという規定としての実在性が主要な論拠になるとバウムガルテンが見なしているという点が⁵、トマスとの違いとしてここでは際立っていることを指摘することにとどめたい。この点に限らず、神の知らないし知性をめぐる様々な論点が、中世のスコラ学とバウムガルテンを含むライプニッツ・ヴォルフ学派との連続性および非連続性を哲学的に考察するための重要な題材であることを示す一つの事例としてこの試訳を提示することにしたい (I)。

⁵ 中世から近世にかけて実在性という概念をめぐる哲学的考察としては、檜垣良成「*Realität* の二義性——中世から近世へと至る哲学史の一断面」(『近世哲学研究』、第19号、1-34頁、2015)を参照のこと (I)。

試訳

『形而上学』第4部「自然神学」第1章「神の概念」第2節「神の知性」⁶

§ 863.

判明な認識は実在性である (§ 531)。神においてはあらゆる実在性がある (§ 807)。それゆえ、神は判明に認識する。それゆえ、神は、知性を持ち、知性的実体であり (§ 830)、精神である (§ 402)。

§ 864.

神においてはあらゆる最大の実在性がある (§ 812)。多くのものが判明に認識されればされるほど、判明な認識はますます大きい (§ 634)。それゆえ、あらゆるものの判明な認識は最も判明であるだろう (§ 161)。ところで、あらゆるものの判明な認識は可能である (§ 632)。それゆえ、神においてはあらゆるものの判明な認識があり、その認識は最も判明である。

§ 865.

神の知性は最高であり (§ 863, 812)、不可変的である (§ 839)。それゆえ、神の知性においては先行ないし後続する考え [cogitatio] はない (§ 125)。神の知性は、最多最大のものの、最多で最も明晰な諸々の徴表を、最強で最も異なった仕方で結び合わされたものども [socium] において表象するかぎりにおいて、最高である。それゆえ、神の知性は、最も深く、最も明らかで、最も純粹である (§ 637)⁷。

⁶ *Metaphysica*, 1739 Halle. 2. Auflage, 1743. 3. Auflage, 1750. 4. Auflage, 1757 (In: *Kant's gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften Bd.XVII). 5. Auflage, 1763. 6. Auflage, 1768. 7. Auflage, 1779 (Reprint: Hildesheim 1973). 本稿では、カントが使用した第4版を底本とする。frommann-holzboog から出版された Günter Gawlick と Lothar Kreimendahl による全パラグラフの羅独対訳版 (*Metaphysica, übersetzt, eingeleitet und herausgegeben von Günter Gawlick und Lothar Kreimendahl*, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011)、および、Courtney D. Fugate と John Hymers による批判的英訳 (*Metaphysics, A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*, translated and edited with an Introduction by Courtney D. Fugate and John Hymers, London, New York 2013) を参照した (H)。

⁷ Cf. 「神の知性は最も完全である。最も完全な知性とは、あらゆる可能なものを判明に表象するものである。こうして神の知性によってあらゆる可能なものが判明に表象されるのだから、神の知性は最も完全でもある」(ヴォルフ『学問的方法によって論究される自然神学』第1部第2章 § 168)、「最も完全な知性と言われるのは、あらゆる可能なものを判明に表象するものである」(ヴォルフ『学問的方法によって論究される理性的心理学』第4節第1章 § 647) (I)。

§ 866.

神は自分自身を、能うかぎり、最も充満した仕方で認識する (§ 865)。神についての認識は**広義の神学** [theologia significatu latiori] であり、それによって神がみずから自身を認識するところの神学は、有限なものどもの諸々の神学がかの神学に似ているものとして志向されるべきであるかぎり、**範型的** (ἀρχέτυπος) **神学** [theologia exemplaris] である (§ 346)。

§ 867.

神は、あらゆるものを表象しながら、あらゆる可能世界をみずからに表象する (§ 864)。これは神の内的な完全性であり (§ 37)、神の本質である (§ 816)。

§ 868.

神はあらゆる有限なものあらゆる本質を最も判明に認識する (§ 864)。それゆえ、諸物の本質は、神の知性において表象されるかぎり、神の知性に依存し (§ 14)、神の知性において永遠である (§ 849)。

§ 869.

神はあらゆる可能世界をみずからに最も判明に表象する (§ 867)。それゆえ、神は、最もよい世界も (§ 436)、最も不完全な世界も (§ 442)、この世界も表象する。世界は、感覚的に表象されるかぎり、**可感的世界** [mundus sensibilis] *) (目に見えるもの) であり、判明に認識されるかぎり、**可知的世界** [mundus intelligibilis] **) である。神はこの可知的世界を最も判明に認識する。それゆえ、この世界のあらゆるモナドを、この世界のあらゆる魂を最も判明に認識する (§ 864)。人間の魂の最も判明な認識を手中にしているものは**諸々の心の吟味者** [scrutator cordium] ***) である。それゆえ、神は諸々の心の吟味者であり (§ 740)、そして各々すべてのモナド、各々すべての魂の、可感的世界の表象を洞察し (§ 400, 741)、しかも、与えられたモナド、与えられた魂が、自分自身と、世界のみずからの表象を知っていたのよりもはるかに完全にである (§ 864)。

*) die Welt, als ein Schauspiel der Sinnlichkeit. **) die Welt, als ein Gegenstand des Verstandes. ***) Hertzens-Prüfer.

§ 870.

神において感覺的認識はない (§ 864, 521)。それゆえ、神は下級認識能力をもたない (§ 520)。神には何も曖昧ではなく、何も混雑していない。したがって、神は、いかなる物も他の物より明晰に認識せず (§ 528)、注視 [attendere] もせず、捨象 [abstrahere] もせず (§ 529)、熟考 [reflectere] もせず、比較もしない (§ 626)。

§ 871.

神はあらゆるしるしづけられたもの [signatum] を最も判明に認識するのだから、あらゆるものの直観をもつ (§ 620, 864)。また、あらゆるしるし、および世界における諸々の魂のあらゆる象徴的認識 [cognitio symbolica] を認識する (§ 864, 869)。それにもかかわらず、神において、諸々のしるしの知覚の方が、諸々のしるしづけられたものの知覚よりも大きいし小さいということは決してなく (§ 870)、両方の知覚は常に最大である (§ 864)。

§ 872.

神はあらゆる連結を最も判明にみずからに表象する (§ 864)。それゆえ、最高の理性をもつ (§ 640)。神の理性は、知性が最高であるかぎりでは最高である。したがって、不可變的であり、諸々の推理 [ratiocinium] のあらゆる継起なしに (§ 865)、最多のもの最大の連結を洞察するものである (§ 645)。

§ 873.

神の認識は、最高の広大さ [extensio] および偉大さ [maiestas] に属するのであり、最も正確であり (§ 864)、最も秩序づけられており (§ 822)、あらゆる無知と誤り、狭さ [angustiae] と浅薄さ [levitas] を除いたものであり、それにおいては何もかも乱雑なもの [tumultuarium] に属さず (§ 515)、最も明晰で、最も判明であり、あらゆる真理に属する。したがって、最も確実であり、それにおいては何もかも曖昧なものには属さず、何もかも混雑したものには属さず、何もかも不十全のものには属さず、何もかも満たされていないものには属さず、何もかも不純なものには属さず、何もかも表面的なもの、真実らしいもの [probabile]、疑わしいもの、ないし真実らしからぬもの [improbabile] には属さず、何もかも死んだもの、不活発なもの、思弁的なもの

[speculativum]には属さない (§ 669, 671)。神は、あらゆる確実な原理、それらのあらゆる原理づけられたもの、諸々の原理および原理づけられたもののあらゆる連結を認識する (§ 864, 872)。それゆえ、神の認識は最高の知である。神は最も判明に、諸々の魂のあらゆる、無知、誤り、認識の狭さ、貧相さを認識し、その認識において、粗野なものに属する、乱雑なものに属する、暗黒に属する、混雑に属する、不十全に属する、満たされなさに属する、不純さに属するいずれのものを認識し、諸々の魂のあらゆる、道徳的な確実性、真実らしいこと [probabilitas]、疑わしいもの、真実らしからぬこと [improbabilitas]、意見 [opinio]、議論されていること、心配事、不活発で死んだ思弁を認識する (§ 869)。

§ 874.

神が知っている (§ 873) のは、I) それらが単に可能なものとして考察されるかぎりでのあらゆるもののあらゆる規定である。これは**単純な知解の知** [scientia simplicis intelligentiae] *) である⁸。

*) die Wissenschaft des Möglichen.

§ 875.

神が知っている (§ 873) のは、II) 現実的なものどものあらゆる規定であり、1) この世界に関わるのは、(直視の) **自由な知** [scientia libera] *) であり、α) 過去のものどもを**神の想起** [recordatio divina] **) によって、β) 現在のものどもを**直視の知** [scientia visionis] ***) によって、γ) 未来のものどもを**予知** [praescientia] ****) によって神は知っている。**哲学的ソツツイーニ主義** [socinianismus philosophicus] は未来の偶然的なものどもの神の予知を廃棄する見解であり、誤りである。

*) die freie Wissenschaft. **) das Angedencken. ***) Sehn. ****) Vorhersehung Gottes.

§ 876.

神が知っているのは、現実的なものどものあらゆる規定であり、2) ここではない他の世界に関わるのは、**中間知** [scientia media] *) である。この世界のいずれの出来事の代わりとしても、他の出来事が存在しうるであろう (§ 363, 324)。ところで、いず

⁸ 単純な知解の知、直視の知、そして中間知(これを最初に切り分けたのはルイス・デ・モリナである)の区別に関するライプニッツの議論としては『弁神論』(第1部 § 39-43)を参照(I)。

れの出来事も、世界のあらゆる後続することになる状態によって不定の仕方でも部分的に異なっているみずからの諸々の帰結〔consectarium〕をもつてであろう (§ 488)。それゆえ、もし、この世界のたった一つの出来事の代わりとして他の出来事が存在していたとするなら、この世界は、その出来事に継起するあらゆる状態によって、それどころか先立つあらゆる状態によっても (§ 357, 278)、部分的には、あるがままとは別の世界であるであろう。それゆえ、いずれの出来事の代わりであれ、この世界においてみずからのあらゆる帰結とともに存在することができていたであろういずれのものも、中間知によって神は知っている (§ 378)。

*) die mittlere Wissenschaft Gottes, oder dessen Einsicht bloss möglicher Welten.

§ 877.

神は現在の世界の諸状態を常に最も判明に意識している〔conscius〕 (§ 875)。それゆえ、神は決して眠らない (§ 556)。同じことは § 870 から明らかである。神は、私たちのようにではなくて (§ 870, 544)、傑出を通じて直視の知によって (§ 875) 覚醒ししつづつ感覚する (§ 552, 826)。

§ 878.

永遠に神は未来の物を、能うかぎり、みずからに表象した (§ 875, 843)。それゆえ、その物が世界において現在のものとして生じているかぎりは、それが予知の客観から直視の客観へと変えられるにもかかわらず (§ 125)、何も神の認識には付け加わらない (§ 161)。永遠に神は過去の物を、能うかぎり、みずからに表象するだろう (§ 875, 843)。それゆえ、現在の物が過去の物になるだろうかぎりは、その物はたしかに直視の客観から想起の客観へと変えられるだろうが、他方で何も神の認識からは出ていかないだろう (§ 161)。神はこの世界のあらゆる継起する状態を永遠に直観し (§ 875)、それゆえ、神の認識の内的な不可変性が考えられうる (§ 839)。

§ 879.

誤ることができないものは**不可謬**〔infallibilis〕*) である。それゆえ、神は不可謬である (§ 873)。不可謬性が最小であるのは、もし、誰かにとって、ただ唯一の最小の真なるものを偽なるものと混雑することが最小限に不可能である場合である。それゆえ、誰かがより多くより大きな真なるものを偽なるものどもと混雑しえなければし

えないほど、そのような混雑の不可能性が大きければ大きいほどに、その誰かはより不可謬である。それゆえ、神に最大の不可謬性を私たちがあてがうかぎりは (§ 812)、神を、最多最大の真理をいかなる偽なるものとも絶対的に混雑しえないものとして、私たちは崇拝する。

*) unfehlbar, unbetrieglich.

§ 880.

最小の確実性とは、一つの最小の真理の最小に明晰な認識である (§ 161)。より明晰に、より多くの、より大きな真理が認識されればされるほど、より大きな確実性があるだろう (§ 160)。それゆえ、神に最大の主観的な確実性 [certitudo subiectiva] をわれわれがあてがうかぎりは (§ 873, 812)、神を、最多最大の真理を最も判明に認識するものとしてわれわれは崇拝する。神の真理が最大であり (§ 822)、存在が神の本質と何であれ有限なものの存在を通じて論証されうるかぎりは (§ 856)、同じ神は客観的に最も確実なものである (§ 93, 812)。

§ 881.

神の自由な知は神の相対的な完全性である (§ 875, 815)。そしてその知が最も真であることが絶対的に必然的である際には (§ 879)、この世界がそれ自体においてかつそれ自体によっては偶然的に存在するものだとその知は神に確立させる (§ 361)。したがって、その知が仮定的にのみ必然的であることが絶対的に必然的である (§ 102)。それゆえ、神の自由な知は様態の類比物である (§ 827)。

§ 882.

知恵一般 [sapientia generatim] *) は目的の連結の洞察 [perspicientia] であり、しかも **知恵は特殊には** [sapientia speciatim] **) 諸々の目的の洞察であり、**思慮** [prudencia] ***) は諸々の手段 [remedium] の洞察である。したがって、神はあらゆる知恵のあるものである (§ 872)。あらゆる知恵のあるものであるとわれわれが言うかぎりは、1) あらゆる目的、2) あらゆる手段、3) それらのあらゆる可能な連結を (§ 343)、4) あらゆる質、5) あらゆる量に関して、6) 可能な最大の連結において、7) 最も確実で熱烈に洞察するものを (§ 880, 873)、われわれは崇拝する。

*) Weisheit überhaupt. **) insonderheit. ***) Klugheit.

§ 883.

神はあらゆる目的を知っている。したがって、最もよい諸目的も、最もわるい諸目的も知っている。それらのうちのどの目的が他の目的の手段でありうるかを知っている。したがって、あらゆる目的の可能なあらゆる従属的秩序づけ〔subordinatio〕を、またあらゆる同位的秩序づけ〔coordinatio〕を (§ 315)、何かに即したあらゆる目標〔scopus〕を、そして端的に究極のものを (§ 343)、それらの目標のあらゆるよさとよさの度に即して知っており、諸々の手段とのあらゆる可能な連結を知っている。そのようにして、たしかに神にとっては何らかの目的が、その目的があるのとは別であるようには決して見えないであろうが (§ 879)、それにもかかわらず、それぞれの目的がその目的を認識するあらゆる個々の魂にとってどのような仕方で見えるのかを神は同時に認識するであろう (§ 869)。それゆえ、神は最もよい諸目的について最もよく、それらが最もよいものであるということを知っていた (§ 882)。

§ 884.

神はあらゆる手段を知っていた。したがって、それらが定立されると最高の完全性が定立される (§ 187) 最もよい諸々の手段も (§ 882) 知っていた。ところで、諸々の手段が定立されると、目的が定立される (§ 326, 341)。それゆえ、最もよい諸々の手段は最もよい目的に従属的に秩序づけられる。神はそれらが、最もよい目的に従属的に秩序づけられるかぎりで、どのような仕方でも、またどれほどに従属的に秩序づけられるのかを知っていた。

§ 885.

確実な手段〔remedium certum〕*) とは、それがそのように認識されかつそれほどに認識されるように、実際に〔re vera〕そうでありかつそれほどであるところのものである。したがって、単にそう見えるだけで、まさしくそうあるのではないか、あるいはそう見えるようにあるのではない仮象的な手段と、また、その真なるよさ、およびよさの度が明らかでない不確実な手段と対立する。最もよい諸々の手段は、それらが仮象的であるのではないかぎりにおいても、神がそれらのよさについてもよさの度についても最も確実であり、それにもかかわらず、やはり神はそれらについての諸々の魂のあらゆる可能な疑いを洞察するものであるかぎりにおいても (§ 869, 873)、

最も確実である (§ 882)。

*) ein gewisses Mittel.

§ 886.

手段がより実り豊かであればあるほど、それが定立されるとより大きな完全性が定立される (§ 166, 341)。それゆえ、最も実り豊かな諸媒介〔medium〕は最もよいものであり、逆もまたそうである (§ 187)。実り豊かさのうちのを何であれどれほどのものがもつとも (§ 882)、与えられた諸々の魂に何であれ実り豊かさのうちのだれほどのものが帰されるとも (§ 873)、神は最も実り豊かな諸々の手段を知っていた (§ 884)。

§ 887.

最もよい諸々の手段は、最もよい目的にとって (§ 884) 満たされたものである (§ 886)。それゆえ、それらは満たされていないものであるのではない (§ 81)。もしそれらが過剰であったとするなら、或る種のものには目的に対して何ももたらさないものをもつであろう。それゆえ、よいものを現実化せず (§ 341)、またそれにもかかわらず、まったく不毛ではないものをもつであろう (§ 23)。したがって、わるいものをもつであろう (§ 146)。それゆえ、最もよい諸々の手段は最もよい目的と対応している。神は、最もよい目的と対応している諸々の手段を知っていた (§ 884)。確実に対応している諸々の手段は**目的を全体的に帰結させるもの**〔finem ex asse consequens〕*)である。神は、最もよい目的を全体的に帰結させる諸々の手段を知っていた (§ 885)。

*) den Zweck völlig erreichen.

§ 888.

目的を全体的に帰結させる最少の手段を通じた目的の現実化は、**最短の道**〔via brevissima〕*)である。最もよい諸媒介の使用は常に最短の道である。その理由は以下のとおりである。その場合に目的は、いかなる手段も過剰ではなく (§ 887)、それらの各々すべてが最も実り豊かである (§ 886) ところの、目的を全体的に帰結させる諸々の手段を通じて現実化される。したがって、それらはいかなる最少の手段であるだろう (§ 161)。[以上がその理由である。]神はあらゆる最短の道を知っていた (§ 887)。

*) der kürzeste Weg.

§ 889.

全知 [omniscientia] *) はあらゆるものの知である。神は最も全知である (§ 873)。神がそのようなのだとわれわれが言う際には、§ 863-888 が提示するようなものをわれわれは崇拝する。

*) Allwissenheit.

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学／
日本学術振興会特別研究員)
(ひがき・よししげ 筑波大学人文社会系)

※本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費：15J00085（石田）および基盤研究C：15K01984（檜垣））による研究成果の一部である。